

Policy Topics

「現代イスラム社会のライフスタイル—近代化と伝統回帰にゆれるトルコの場合」¹

Diversity of Lifestyles in a Contemporary Islamic Society : A Case of Turk

井藤 聖子²

Kiyoko Ito

トルコ共和国イスタンブル在住の研究者、井藤聖子氏による講演会が開かれた。講演内容は、トルコ社会の現状を学生たちに講じるものであり、祭儀、祭典の分析からトルコ社会のライフスタイルを紹介する、文化人類学的な枠組みにもとづくものであった。

まず、地理である。地図で見ると、トルコは、西アジアと東アジアにまたがる。北に黒海、南に地中海が広がるトルコの国土は、西アジアのアナトリア半島と東ヨーロッパのバルカン半島トラキア地方にまで広がる。首都はアナトリア中央部のアンカラ、最大の都市はイスタンブルである。

次に歴史、トルコのあるこの地方は、かつては広大な領土をなしたオスマン帝国の一部であった。イスラムの宗教国家であったオスマン帝国は、20世紀初頭には民族主義運動の台頭を迎え徐々に衰退し、第一次大戦後における敗北、崩壊することとなった。戦勝列強が領土を分割した1920年代に

は、民族主義政府が勃興、独立運動のなかで現在のトルコ国家が誕生した。

現在のトルコ共和国の成立は、この1920年代にまでさかのぼることができる。とりわけ大きな社会文化変容をもたらしたのが、「建国の父」ムスタファ・ケマル・アタチュルクの登場である。1924年、トルコ共和国の初代大統領となった彼は、政教分離、世俗主義、民族主義を掲げ、近代化を推し進めた。オスマン帝国時代のイスラムのあらゆる文物、習慣を禁止し世俗化していったのである。

それはトルコ社会の西洋化を意味した。単純に、イスラムを排除することすなわち世俗化ではありえなかった。西洋という新しい価値観による社会文化変容を促すものだった。トルコ共和国の歴史は、1920年代の共和国としての成立、アタチュルク以降、西洋化＝近代化が急速にすすめられたのである。

とはいっても、現在においても、トルコの人口の99%の人々がイスラムを信仰する。では、国家政府によって進められた近代化、世俗化の中で、トルコ社会はどのように変容してきたのだろうか。そして、現代のトルコの人々はどのような文化生活を送っているのか。講演は、現代トルコにおけるイスラムの儀礼紹介を中心にすすめられた。

この講演のなかでは、個人の一生における儀礼(生誕式、成人式、結婚式、そして死の儀礼)と季節儀礼であるラマザン(断食月)の事例が報告された。

トルコ社会における通過儀礼(誕生、成長、婚姻、葬儀)と季節の儀礼(ラマザン)

クルクヌチュカールマック(誕生儀礼)。子どもが生まれて40日間、母子は、家から

¹ 本稿は、2011年1月6日に行われた総合政策学部講演会における講演の報告である。講演時のテーマは表題と同じである。

² イスタンブル大学大学院トルコ語・トルコ文学科博士課程

出ない。母親が退屈しないようにと、友人、知人、それに親戚が毎日訪れる。そして出産から40日目には40個の石を集めて、7種類の植物をいれたお湯でコーランを唱えながら赤ちゃんを洗う。成長儀礼(ディシヘディー)、赤ちゃんに最初の歯が生えた時に行う儀礼で、様々な穀物を茹で、食べさせる。その際には、鳥にも食べさせる。それは目的地へと鳥が飛び立つように、すなわち目的を達成すること、さらには将来の不幸が鳥羽のように軽くなるようにとの願いが込められている。幼少の男子には割礼式がある。ペニスの包皮を一部切り取る儀礼であり、割礼後には盛大なパーティを開く。



成長儀礼

次に、婚礼である。クナゲジェシイは結婚の決まった女性の婚前儀式で、結婚式の前の日に行われる。衣装の種類は多数あるが、だいたい赤い服を着、ヴェールを被り、手にはヘナをぬる。その手を赤い布で覆う。この儀式には、清潔であることを示す意味合いがある。つまり、清潔なまま嫁ぐということだ。このときは皆静かで、泣かせる歌がうたわれ、花嫁はわんわん泣く。しかし、それが終わると、皆で踊る。トルコ人は踊り好きだ。それまでの静かな儀式は一

転、陽気な会に変わる。

ここでは、一組のカップルの結婚式を紹介したい。新郎がアゼルバイジャン人で、3つの結婚式があった。アゼルバイジャンで1つ、トルコで2つの結婚式をした。まず、形式ばらない一般的な結婚式の形態、服装は形式張っておらず、会場は広大なホール、ジュースと少量のナッツがあるだけというような結婚式だった。会場の壁にトルコとアゼルバイジャンの国旗が掲げられた。参列者は何百人もやってくる。みながただ踊っているだけというような印象を受けたが親戚、知人の余興もあり、格式ばっていないことが分かる。みな好きずきに結婚を祝うといった感じである。花嫁がウェストに赤いリボンを巻く。このリボンは花嫁の男兄弟がつける。これは花嫁の貞操を守ったヴァージンの印であり、男兄弟から新郎に花嫁にまかせるといったメッセージが込められている。

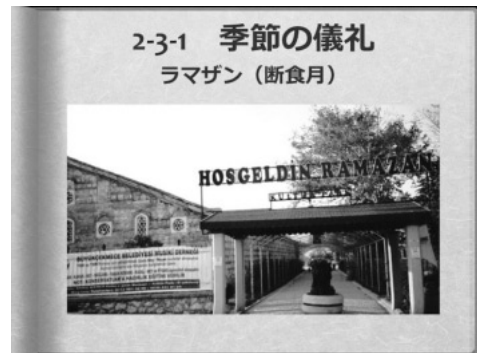


トルコの結婚式

最後に、西洋風の結婚式、ウェディングドレスでリボンは巻いていない。会場はレストランで、お酒も料理も出てきた。そのほか、トルコでは結婚式のためのスタイル、区役所へ行き、そこのホールで結婚を宣言



結婚式での余興



ラマザンを告げる街頭看板

するといった式もある。

そして個人の最後の儀礼が葬儀である。葬式はイスラムの僧、イマムによって弔いの儀式が執り行われる。礼拝は男性が前で女性が後ろで行う。

お葬式の後、トルコのイスラムの場合、3、7、40、52の日に皆が集まりお参りをする。52日目に行われるのは、日本語で言うと「鼻が最初に取れた」という儀式だ。どうして鼻が取れるのか。それは、埋葬されている人が生きていると思い起き上がり、毎日、棺の蓋に鼻をぶつけ、52日目には取れる、という。取れた時に自分が死んだことを知り、天国へ行くのだという。

ラマザン(断食月)、この月、一月間は、食事をしてはいけない。禁欲しなければならず、罵詈雑言、飲酒、喫煙も禁止される。ただ、日の入りと同時に食事を始めなければならず、たくさんのご馳走を食べる。

ラマザン後にはラマザン・バイラム(断食月明け祭り)がある。別名砂糖祭りとも言い、断食月が明けたことを祝う。

このように、現代トルコにおいても、イスラムの伝統的な儀礼が執り行われている。20世紀に入り、世俗化、西洋化が進められたが、イスラムの伝統が残っているのである。

トルコにおける近代化と伝統回帰

トルコの歴史を年表風に単純化すれば、イスラムから脱世俗化された西洋近代への移行、という歴史的な変容を図式的に思い浮かべるかもしれない。しかし先に述べたように、イスラム伝統の儀式や習慣が現在トルコにも残っている。こうしたことから、現代トルコ文化を伝統的イスラムの国として捉えたいくなるかもしれない。しかし、現代トルコの状況はこうした解釈図式からは捉えきれない。いわばモダニティの複数性というべき状況にこそ、目を向けるべきであろう。

講演において、井藤先生が強調されたのはそうしたことだった。最後に、紹介されたのは、現代トルコのファッションである。現代のトルコで販売されている水着とウェディング・ドレスの事例が現代トルコ社会の近代性と伝統を考える上で好例を提供する。

一つは、日本でも見られるような水着である。肌は露出されている。こうしたデザインのものが売られる一方で、違ったデザインのものがある。出来るだけ肌の露出を抑え、ヴェールつきの水着である。これは、できるだけ女性の肌を布で覆い隠すイスラ

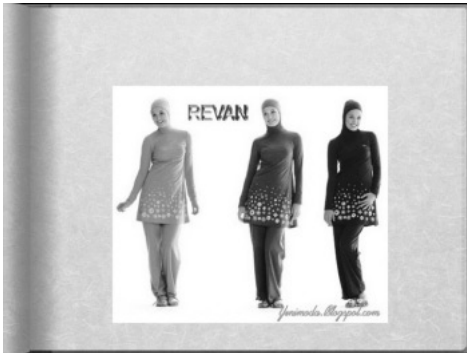
ムの伝統に則ったものだ。もちろん、最新の水着である。しかし、コンセプトとして考えた場合、イスラムの伝統を現代的なデザインで表現しているのである。同様に、こうした例はウェディング・ドレスにも見られる。背中や腕などを出した西洋風のデザインのものがある一方で、肌を極力隠したものがある。これも水着のデザインで見られたことと同じである。つまり、かつてのイスラムの宗教的伝統が、現代的な装いで表現されてもいるのである。こうした現象を「新しい伝統」と言っても良いだろう。このことを単なる伝統回帰と言うべきではない。

グローバリゼーションは、地球上のありとあらゆるローカルな生活世界に対して包括的に文化変容を要求する。しかし、たと

えグローバル化が地球上の社会に同時的に変容を促すとしても、この世界の人々は多様である。グローバル時代の文化状況の特徴は、文化の均質化／多様化の様相を呈する。グローバリゼーションは一方では均質化、もう一方で、多様化を促進するのである。

これはトルコに限ったことではない。近代化か伝統への回帰か、という二分法に回収されない。両者を「ゆれる」ことこそが、現代人の流儀であり、現代トルコひいては世界の人々のあり方である。

(報告 山中速人 関西学院大学総合政策学部教授)



水着



婚礼衣装